言葉の玉緒　七

ホ 2
143
7 止

詞瓊綸七之巻

古風(いにしへぶり)の部

○万葉集ニよりて。古風の歌をよむともがら。仮字(かな)づかひをバくはしく
たゞさずともあれど。てにをはのことハたえてさだめざる歌ニ歌もさらぬ詞も。と
とのへざることのミ世にあまねかる時ハかなかなづかひぞ。定まれるのみなれバ。み
づからかちかゝりて。こゝろえたれまなるおとハなくして。しらぬかれふことたふ
うまるゝなうとれよりよるほうおほぶしなれど。いとたやすきにをてにをはしみな
定まれるそのひの有て。そをよくさとる時ハおのづからなれど世のたゞ事も
さとさまへさとるにしるやもおもからず。さる歌ニまべく後の世まへ大かくここの集
のさんなうとこづらし思ひゆるせる人も。程るをくしく。とにもきれバあ

同攻會印
門 水2 利
號 143
巻 7

やすらかにおかしきぞかし。今にまれ詞にまれ。此てふをそのそのえぞるは。たとへ
ばうしなきよしてこ随ふらん衣のおもし。その言葉をいふなでうた後継
ありたぬつる此母乃ならしからんは。えぐらしかるじやも。猶る此古風をまなぶと
ものがらしまきはそのへむ物こし思へるぬは。いかしへぶりにて。ふをも定まる
はなきこくやせらむそとしく此そのひは。さらに後の学に定めくる物よはなる
ぞ。神代の始より人の言語に有ことひて。おのづから定まれる物にしもなれ
ば。おもふらにんせざきぞし。それのづからよくそのへりきば。いにしへはちとふこ
まかせぶし学ぶことしなりしを。後の学ありて。やうくちとぞいやしくや
むことは物うくするまたにあぐふくもなるふよりて。とかくさだむるちく
もちじまらしかまでふ今はちとさらにまづおのこそざれど。いまぞめえ

かくなん歌はまことをいふてふをはなれなく。けれどもなかりしなりとて。
まなべきちとらなしむやはまのかなづかひも古へはおのづからわきまへる言葉の声
につきて定まれるものそんせずけれどそのづからしたがふことはなかりしなるを。
後ふそのさだかならし後よみぞまとまるふよりて。世のさだは出来しに
あらんや。いで上つ代よりてふをも定まりの正しかりしるよしくらしくい
ふむ。まづ古事記と日本紀とふのまなるをもしき継き合せて百八十余首かる。
皆いと神さびて。今の学に耳きき詞ともはおそれども。てふをもえにしへりてぞ。
古と来より此等のことくはらる同じくて。あとなる事となし。ちさ中に。
しく仁徳の御世なる皇后の御歌に。こそ二首もよき。天智の御世の童
謡に。あもこそは。猶べもえき（えきは　よき）とかくる此二つなり。かくそとかくるてきとさび

なる。後の格にまがへり。但しこれも萬葉集ハ例あれバ下に出せり上つ代の一つの格ともいふ。又推古。法皇聖徳太子の御うたに。おやなしに汝なりけめやさすたけのそ。汝親なしになりたりやといふことなれバ。後世の格ならバ。なりけんやとあるべきを。君やとかけるハ異也。但し此格も万葉集ハ猶多くかゝれバ。下に出せり 古への格なるべし。後の歌なれも例とあるも。後撰集二なやこ人侍てまつらめや なぞ今ぞらべを呼ていづる。源氏をとめ巻月影なきしさるかり を見やをとめこがちの袖ふるやきしんなる 右の三首をおきてハ。中々しく定まれる格のごとしかくてもいさゝかなく古へも得ることなれバ。上つ代よりしておのづから定まりけることをしるべし。古風をよまん人も。いかでかてにをはをしるべからんてハ有べき。そのことがらハしらねどさはござるなる歌もゝたしかなる。ふかきかさにこそなりて古への歌をバ見まほしくそのひがあると猶さもしぶるも。此萬葉集も二十巻四千五百餘首の中にもあまねく見づらし

き類。又ひがおつきざるなどハ。いさゝか異なることのあれども。てにをはの後のひとしなりてハ。いさゝか中昔の格とはことにてたがへる歌ハ。百首にひとつも見えず。然れバ此てにをはの人のことハしらで。古今集よりこなたのをもちゐて。たがひたがふことなけれど。今此巻にし。古の歌のへとてハ別にいはず。古風をよまむ事をほどく紐鏡三種の作歌ゆよく考へし。かきもらすべきなり。

○萬葉集の中てにをはたがへる歌

十四ノ廿七 たくぶすましら山風乃ねなへどもころがおそきのあろこそえしを

えしもハよしもと也。さて上ハこそとかゝりてきと結ぶ格ハ。集中に多きをこゝハしと結べるハたがへり。しハ志ハ吉の誤也。ころがめのとハ係るのゝの辞なればかゝりをそ

十九ノ四十四 天地とあひさかえんと大宮を仕へまつればたふとくうれしき

こゝハ上よりぞのや何などのてにをはなくしてしきと結べるはたがへり

五ノ六三 たらし姫神のみことのなつらすとみたゝしせりしいしをたれみ[き]

こゝハ上よりたれといへバ見しと結ぶべきを。見きといへるハたがへり。されど志を吉に誤れるなり。万葉ハいとよく似たり

十四ノ六九 妹をこそあひ見にこしかまよ引の横山へろのしゝなすおもへ[る]

こゝハ上にぞのや何などのてにをはもなければ。おもへりと結ぶべき格也。然るをへるといひてハよろしからず。つるといふべきなり。後学も此例あり。二の巻変格の統にもあげたり

十九ノ十六 あしひきのみねのうへにしあは見えねどもおもふにもなしなればいき[る]こともなし

こゝハかゝりなければいけることもなしといふ格也。りしハ流字ハ理などの誤りにやあらんずるなるや

十ノ四十三 秋田かるかりほを作りわがをれば衣手さむく露おきに[ける]

此結句の例を他の所に考るに。いづれも露ぞおきにけるとあれバ。こゝもおのづから露ぞとありしを脱せるなるべし。ぞといはでけるとハ結びがたし

二十ノ六六 からころもすそにとりつきなくこらをおきてぞき[ぬ]やおもなしにして

こゝハ上にぞとあれバきぬるといふべきを。きぬやとあるハ其の時のなまりなれバ。やはりきぬるといふべきを。ぬとのみいへるハたがへるなり

二十ノ九四 たゝしつれのたびにたてまぎをこが旅とおもひにあきらしぞとも[ゆ]

此結句ハ法しぞ思ひといひても。上よりぞとあれバ。ゆると結ぶべきを。ゆと結びたるハ誤りしたるにぞそのまゝ

四ノ五九 いきてあらば見まくもしらず何しかも死なんよ妹といめに見えつ[る]

こゝハぞのや何などなくして。つると結べり。かなれど上の何しかもハ。此結びへはかゝらねばなり。但し此句をいきてあらばと倒ときハ二の句結びたるにて何しかものそへつるをかけ合る

九ノ八 風莫の浜の白波いたづらにこゝによせく[る]見る人なしに

こゝも上にぞのや何なければ。よすといふべきを。よせくるといへるハたがへり。一云 於斯依来藻とあり。これよし。そのかはりまべて万葉のころの格をえらぶ。一うぐ
よるべきをるもを例あり

十四ノ六 むさしねのをみね見かくしわすれゆく君が名かけてあをねしなく[る]

結句こゝと同じき同巻廿一の歌に今一首あり。あを哭しなくるとハ我を哭しなくるといふことにて。其の哭ひとつのかぎりをつめてくとあれるも。相ふ此歌ハ上にぞのや何のてにをはなければ。哭なくとこそいふべけれ。哭なくるといひてハよろしからず。但し変格の例なり。さて此歌ハ哭なみ哭の

きみにこそぞ〳〵ちまさる妹がおよびてとき移しなく。なといへる詞次に。或本なとゝての世なり。なくなの下のなは。係る辞なれバ。とまハよろし。又旧本の本の歌に。あさ移しなくよ。又此の本に十三のひくれにあさ移しなくとぞ。なども。かりどまるもよ文ども係る辞なれバよろし。皆なくハなりとまで見えるも。さてこれにあくといひて。下になよをなどいふ辞を係るを以てとなるといふかよろしかるとをさとるべきなり

十八ノ十九 ほとゝぎすいと待ちきくハたちばな花ちる時ぞきかれけるよ［むら］

ことも上にぞの。やの。かのてにをはなければ。むらと結べるもよろしかるぞ

十一ノ二十 見つゝしれ君が涙のくれなゐにぞをりぬる袖のうらなる方はまさかき［つま］

ことハ上にぞといひて。つまと結べり。りハ禮ハ類字などの誤りにハなかるなる。六帖にハ二の句を。君がなんとぞとて入れり

十八ノ廿四 長方 しら川せみの世の人あはれともなきいやとしくもゆきうら

身をそおもふ夫の糸ふりさけ見つゝひつきに［これ］

あまハ上なきぞといふなどして。これと結べるなれど。但し上に是とい辞なき。此辞あそれ多き例あり。五の巻志の部に出せり

十七ノ八十三 なかとしのふとのつしおといひちらへあがふいのちとたが君ため に［なき］

此結句ハいふいへるなり。なきのとも結びし。上よりなかといひて。なきと結べるなり。いかりしハなきハ添ふとも見えども。さるもありけり。従よく考ふべきなり

二十ノ四十五 ほとゝぎす次まけ鳴く声いふせば紅門ちだ［ド］かくり伝ぐまて

ことハ上にいふと何まだ。むらざらんといまでハうなハるを。さハひかりききまくるほどのことにあかひて。ふをそをみだりにもべきなれども

二十ノ十五 かしこれやみこそかのゆり明月ゆり［や］うへがらむしるしをいむなしにして

此ちハやのむすび なし。つかで

十二ノ十 うしふまでかまふし袖を又まつはさうしとへやみそきこん［うと］

あまをを上にやといひて。又うとと結べるなれ。意のとこそならべきな

九ノ十 にの流のしかたつきぬれでおも［うと］ちりみだれぬらむこの川ぞ［うと］

かくいひてハ。うと二つあり しるしのひがし

十二ノ廿九 長歌 菅の根ハとりて加へ 加尓 あらそひてかへ 加尓 云々

此加へ二つともに飼早と書たれど。早ハさハ也て誤字なるべし。ふとく
いひてハてにをはをのそへず。飼ハ誉字の誤りにて。二つともに加へと訓べきなり。
ともかくもまさ誤字なるを八穎ひなし。されど
古本もかく今の本のまゝに訓てここに出せり

上の件あはせて二十首ある中に。字の誤ある例のあやまりなる。又字のおちたる
あるはやとおぼしきもあり。又変格の例にはあづまうたなど。あまたあれ十首ばかりの
うた。又しらべもよしきを六首ハ東歌なり。然ればこれらをのぞきて。まさしくただか
へるハわづか八九首あり。其集中にくらべ見れバ。今二三首などハあやまりとし
まんかよしも古歌をよみそこなひて見出せる集のなかにも例ありくにき
ちかひのみちがひてかきあやまりたる歌あるべし。四千あまりの歌の中に
そのわづかばかりのなどしでハまじらぬをもてても。古よりてにをは

のうたはひとたのうじ定まり有つることいさとりつべし。

○月氷ハ中てにをは 遠 へるに似て 遠 るにあらざる歌

十一ノ廿二 玉かづら花のみさきてならざるは たがこひにあら めわがこひ思ふを

三ノ四十七 ありしよりもまさりあひざら め 山乃はにいさよふ月をよそに見てしが

四ノ四十 なにかしらぬ人にたましかくしなりバ志ゑや わがせこおくもいかにあら め

十七ノ四十二 わがせこはいづちゆか め ともかくもそかひに見しく今し悔しも

十三ノ六十一 長歌 こぎわかりつともあひがたから め を 但し此めハ妻の字を書たれども ここハ倶字まじりとおもらん

十四ノ十六 みちのくのあだたらまゆみはじきおきてせらしめきなバつら 弦著 はけ めかも。

円十五 しかの浦をゆきかふ舟をよしなしにこぐ らめ かもよ 何 こざる らめ。

十六ノ三十 長歌 あふせんにとをゑきて らめ。やそしらくとをめきて らめ。やふえ

ふきとる笛のねを〔らめ〕や。琴ひきとわきめて〔らめ〕や。と

一ノ十七 長歌 いかさまにおもほし〔けめ〕か。と

三ノ五十四 長歌 いかさまに思ひ〔けめ〕か。と

四ノ六十 いかばかりおもひ〔けめ〕かも。敷たへ乃まくらかたさる夢に見えこし

件の言どもは。らん。けんといふべきを。らめ。けめといへるは。たがへるに似たれども。集中にかく結べる例おほかり。又上にかゝる詞もなくして結べる。日本紀の歌などにもこれかれ例あり。

四ノ四十八 うはさみを見る時ちがいちるは杉手ぬきしつゝ〔か〕恋に過ぐさき

二十ノ五十九 うらめしく君はもあるか〔か〕宿の梅は散り過ぐるまで見しめずありける

七ノ四十二 玉づさの妹は玉〔かも〕あしひきの清き山べにまけば散りぬる

十ノ五十七 秋の夜は月〔かも〕君は雲がくれしましも見ねばこゝだ恋しき

こゝろのかぎりは。皆切れて。下へはかゝらざるに。後加の格の結び辞なくてとぢめたるは。違へるに似たれど。集中に此格なるもあまた見えたり

四ノ六十九 あひ見ずてけながくなりぬこのごろは〔いかに〕好去やいぶかしわぎもこ

八ノ三十 ふるさとはあらしの里はかゝきもあとつぎやらし〔いかに〕つげきや。

十六ノ九 長歌 〔たが〕子ぞとやおもひてあらん と

十八ノ四十一 長歌 〔なに〕しかも秋すしあるればあそびひのとりしたるらん と

これらはいかにたがなにといふ詞にて。下にやもなきも。いかには二つながら切れたり。たがはぞにて切れたり。下へはかゝらず。何しかもは。らんにて切れたり。

十ノ三 世語らず いきはをとりよれる君へど人見おもひ〔こそ〕吹風にならばをしむくべき

十七ノ四十三 長歌 冥さへすりへ有りてあき〔こそ〕よしゑやしと

これらは。こそにて切れたる也。下のてふをえにくりるぞ

十一ノ十六 きのふ見てけふ〔こそ〕へだてわぎもこがこゝだくつぎて見まくほしきも

十六ノ廿七 はちすばは かく こそ あるもの おきまろが いへなる物は うもの葉にあらし

日 四十 なにこそ ふりぐしかくしも ありし

あまりあるこそ八。動かぬこそと結ぶ格なり。切れ也。下のてふをはに かへりけり

十ノ四十一 うらさびて おきぬれど あかる藤の うらもいまこそ 恋八まさらめ

日 四十六 かつしかに志こそ うらふるひまけれ 白浪信乃よるかに 立まなき

十ノ四十 玉ならば まきぬる妹も あらましを こそ 我が ちきさとも ありしかるべき

十七ノ四十五 野をひろみ 草こそ しげき

二十ノ四十 船木も人 あしべにも 我のもしたまも どおのが妻 こそ とこめづらしき

これもハこそとかゝりてきと結べり。此例 日本紀にも二首ありて。上は なぎさ。日本の玉もかの格也。古今集よりことなく只此格なし

一ノ十二 いにしへも しかにあれこそ うつせみも 妻をあらそふらしき

六ノ四十七 うべしこそ 見る人ごとに 語りつぎ 偲ひけらしき

こそにらしきらしと結ぶハつねの格也。又廿の四十四の哥。十八の卅八のひとつあぐるこそと。らしきを添ても結べり。然るにたゞこそハ下にきを添らしき格也。されどきと結ぶ例も上に出せるがごとし。又らしきといへる例ハ推古紀の大御歌に。うべしかも蘇我のこらを大君の使はすらしき と ある

十四ノ三十三 もちぐさの不解 おもひよせかに あひよると よるとしも

こそハ加とやとをかゝれども。そのまゝとハ結ばず。又ちぢえの流れ字。一本ハそのまゝ解易きといふもあれバ。やハてふをもにあしべ

十八ノ四十 あぞ乃秋 遠見しまく ふりふみればおもしろや そでしみやこがく人

此記の句ハ面弥(オモイヤ)えでらしも やすし

てふをはそハあしき

二ノ四十二 なにしかも 此間六句 よろしき君が 御言をかしこみ あふや久しき

むきあふや 此間六句 ゆちさそふ まおくもたえぬらし

あまた八なにしかもこそ切れてあるを下に何の結びなし。あなやのやへかけてえへしがたしと見ゆ ぬのぬへもかゝらず

十九ノ六十八 古今 [なれ]しかど[此下十二句]とぞ見えざりし。云々

こゝも同じく何しかもとて切れたり。下見えぬの字へかけて八見べからず

○又二首の何しかもと八切れたる辞なれ共切れざるがおほし。すべて下に古格の結び辞八無くて。やとらひ又ぞといへるなど。よくせざればまぎれぬべし。今の世の人。古今をよまんにおもへるは此道あしく心得て。下ふまへをみだりにするてあるれ。おれよそ集中に古今調二る六十首そうらいづれも下ふまへはるがことなし。何といへる古くつきても。切れざるかぎり八上のてふまへ心ちりて。切れ所よりつて。そのまゝに結び辞をかくべし

二ノ四十 古今 [いか]さまに思ひきまれり 云々

三ノ五十四 古今 [いか]さまにかおもひ見えかど 云々

これらも上の何しかもと同じ例也。加もとて切れたり。されバ下にいかさまの結びはなきなり

○古今の結一つの格の例

二ノ二十 いまづるふ入日さし[ぬる] 云々

三ノ五十八 久かたのあまさかりし[ぬる] 云々

三ノ五十四 夕やこにとかくりまし[ぬる] 云々

五ノ又 うちなびきこやし[ぬる] 云々

五ノ四十 むさゝびのちゝえ[ぬる] 云々　月九 うぐみうまうしあり[つる] 云々

十七ノ五十七 わするなるしやる[つる] 云々　十九ノ五十七 家君のなましや[なる] 云々

二ノ四十 大君のみゆきてきて[なる] 云々　十七ノ四十八 かつり来て志ぶき流ぐ[なる] 云々

十八ノ二十 こがよいうとましほへ[なる] 云々　五十七 かしてとのこし延へ[なる] 云々

十九ノ十三 かくりつぎなかへき[なる] 云々

伴の家ども。上なしてそとかてらざして。なとのおく切れたり。又

五ノ六十一 きぎさかひにつく八されまかりいま[せ] 云々　二ノ五十七 猪とつかなひいま[せ] 云々

古事記上 八千矛神 よるひそしいりかよ八[せ] 云々

こゝなども上にこそあるして。せといひて切れる。上のなと同じ格也。此なせ八皆古今のあるぞに在て本結他へ移る除にいふ。一つの格そ。下へぞを加へてなぞせぞと

又是ハよく字ゆるし。右に引る二の歌もおなじ。右歌のみならず其をも一云とあれ
ばこそちよくなれど。こゝにいふてんおもへし。さて此様短歌ハなど一首あり。
三ノ五十七　わざくらへまもりもわすらでみるも山がらの[つき]たまへしひとなし
こゝにあり。此歌とつきぞと。すがしを加へて見バよくきこゆ

○円来てふをはの訓を誤れる事

来中にてふをその字誤るまでなるもあり。或ハ上をちぎき。或を下ちぶき。
或ハ上下共に誤れ又無とあるハ。ありしをなきとしよめり。有とあるハなりともあり
なりと来とあるハ。なりなるなりいづれとよまる。かくのめきたるひをならべて後
としかるはあれバ。今ぬまにあるをとなし。但し今此本。ならべての訓にハ誤りい
とおぼしれず。てふをはの訓にハ大かた誤りなくなし。十六の巻に六四のしるる所がる門の作れる小田をもむかしを

またぶときとてもとほとに飛此居の字。今の世の人ならバ必なると訓べきに。なりと訓るハ。古の
までもかくふ何づひ九をさらし。此句上よぞのやものの辞かくれど。必なりとある様に。又十三乃巻
九の巻にもなりとあるを。吾者事上為（ワレハコトアゲス）
辞挙叙吾為言幸（コトアゲゾアガスルコトサキク）。此二つの為字。一つハ上のなりてぞなる
なふなるを訓て。かくのおもくはじまなる為字あれども。上のてふをそにもさぐひてよまる
とゝ此するなひて。来中に字を誤るところを。よまをくへるてふをはなども大かたハよろしく
ことて。誤れるハ　その中にまたくによみ誤れるを。今ここに引出て論ふ。
よくなし

十五ノ五十　わみぢ紫比叢なんなりしやどりぬるなをまつらん人[之]かなしと
此法も此之字のと訓るハ誤るもの故れバ下を加なしきとら。加なしさとら法ぶ様
なりことハ加なしと法びよれぞ。之字ししとよむべし

十六ノ六二　ぬむむ法そでの大君見るおとふこせ乃小君[之]れとしかゆるかなと
此之字がと訓ヱ。そまとたしかしねど。猶しとよむべきなり
七の巻にも之字ぢとよむべき所。誤りてのと訓る所これありき。なほよくて知べし

二ノ六七　なさざる泳ぐとそさぎ月日の[数多成塗]そこゆゑなりしえて
この数多成塗を。あまたなりぬと訓るハ。あまたなりなり。上のとなれば。ぬとハ法び
がなし。ならと法ぶ様なり。その多く塗字をぬとのとよまんとも。らで。さまでは此なる

まよくまりめると訓べきなり。数多字をかねて
よむべきことわり此本にもおほくあるなり

七ノ卅　あさぢはばおきゆきみけ嘗（ナメ）みそとよりへつゝなれりそくださきのゝ

こは上にてをはなれど。嘗字をなめと訓るはいかゞなり。
なむとよむべし

九ノ卅二　ますらをのゆきのきくみなみに偃有（コヤセル／フシタル）

此偃有は。上ののをうけたるにて。のきはをこやせるといふ。
上ののきにて偃有といふ事へかゝるときは。ふしたるといふこやせるとよむべし。こやせると訓べし

十ノ十二　もゝしきのおほみや人はいとまあれや梅をかざしてこゝにつどへる集有（ツドヘル）

こは上にやとあれば。つどへると訓るはかなはず。つどへると訓べし。
此歌のやかなのこと。上の巻やの條にいへり

十ノ十三　むしろおもひをすゑのかはらおそく寝起しれどや妹がまたん難（ガタシ）

此歌上にぞのや何の辞なれど。難字がたきとはよむべからず。
がたしとよむべし。但し上の句たがひあれや

十一ノ廿二　よきこと夢見しこともやまとぢのよるにふるむけ吾（ワガ）せこ

此歌上にぞのや何の辞なれど。吾をわれとよみては。かなはず。吾字はわがと訓べし。かの結びの。と同様なれば。わがと訓べきなり

十二ノ卅八　みやこへとおもふをいかにして我がなぞ乃を乃結手懈毛（ユフテタユキモ）

此歌を校本にむすびてとけしと訓るはいかゞ。又ゆふてたゆきもと訓べし。
上の句の辞の結びにかなはず。わがゆきとゝと訓べし。
此の巻十一の歌にあまたあり。ゆふてといふを上の句の結び也
も上にあるとかなはず。と訓て。この歌もこれと同じ様なり

十九ノ卅四　天地の神はなかれやうつくしき我が妻さかる離流（サカル）

あれは上にやとうけたれば。さかるとよむべし。奥にある辞を
よむべし。さかるといふ言もうけたれど。さかるとよろし

あちこちとあそびのよみ得たりくさしくよむは猶もあるべき也。こはなほよく考へてさだむべし

○古風の辞

こは万葉集のうちに。古き歌よりこなたの歌には見えぬ辞をいふ

ほじん辞も。はるひさまでは古風なるかぎりを。たくさんしぬき出
て。ただ心をよろち集先あるせり。されど此辞どもく。すべてにを
そのあまねからのひふにてハ。はのは定まりある事とあらぬもあるし。
むをつくべし。此辞どもきびしくえて。今よまむ人はておもてを
みだりにして。かやすくよむべき也。

も

一　はる霞はなつむ神のうしろさびてかすめるみやこえまハかなし　も

二　久かたのあまてるおほくかぎえしみこの御門のかましきかも　も

六　ぬるさとのかをくハあまでまさふよしなしは花をみるらしよし　も

七　さがせこをいづちゆきえとさに竹のそびになし今しやし　も

八　秋もちていくかもはべには錦をの風をたえしはむし　も

廿　ちふるどはゆきまたのだん山乃先しいみてべみそ志めゆふべし　も

三　たく山のいそ本まげを招ふるえてむきびしみなられえるつ　も

同　りのくぬの八十うち川のかぐろあふけさよふ浪のゆくへきらぞ　も

又　梅のもちらくまくみ見る里は竹のもやしにうぐひもなく　も

七　まがもは井はべゆきでにきかはまど志ふきえんとたゆはらく　も

十九　むかしさらでくさはむこの浦の塩干はらくさふしみがあま　も

廿　ほ里えこえちふき星井まであはりける志がちるとよすゆまで　も

同　ほとらどともちもがもやなれてみ河ちの中にあへまちまく　も

十　あべえまばなでしこは草咲たるをまがまち秋そちかく　も

五　天地乃ともに久しくいひつぎとけらしみる哉志らしきうし　と

二　おもしろみむろ山のさ桜うつしきてぞバつ花ちりかてまし　と

十一　きのふえて乃ぞくそこひぞ　こぎをこがねてたくつぎて見せくれけき　と

七　まをかくれみなとのさを登流しそや書よびしそへおちうぞく　と

四　いちんよ八ら川をあらんを何をとうそのひまてそ乃志げき　と

十七　嘉永してゆひてし花と折うききみぞ思ふおもろをたまうしへん　と

十五　秋の夜を春とおもふらん念ぞあてゑいの錦しえぬ　と　むそろぬまぞバろ

三　まがあとうわかきてつる　と　うし

古　東路乃手児のよび坂あえがねて山よう隣ん　と　やどりハ脂しに

六　みろ路をしふるさの登べき情をしそちあぞうちけざゑまかし　と

○かし と　まがし と　ちらし と　まて と　いまぞ と

右の歌どもいづれもと上のてふをはハおのく其の定まりのごとく結びてその下へとを添ふるものと也ハてふを其のうへの所のひらうハかはりてぞと知べし

あたくと　ちやと　あらきをバと　うべと　いそでと　まてと　いまぞと

○とを二つまで添る例　今とかと　あふとかと　あそとかと　やうに添るとりいとかわし

○らと　かしらと　まがしらと　志ましらと

○そと

四　をがみ　そと　おみのいれみ示たちぬとと志がみしくばをしみてぞなき

同　み川乃流りそる舟よし代あと思ひて有しまご　そと　いのハ遥

五　知る　そと　なげくひてしよる　そと　いきづきいうしうし

十九　あをみ　そと　いちり川　深そふ万代りし安あうさんといおつてをなき

二十 うらめしく君[こそ]あるか宿の梅の花をすぐるまでえしめざりける

又ある本そのさと

二 あはれなるかな月は清すめども萩の花散る秋の夜や[こそ]

三 かくのしにまるる物をは萩の花はまでてかりやとひしき[こそ]

十 秋萩乃花野のすすきにほふいづれとか見えるる常のつま[こそ]

猶考ふにおもふ。古き本を見まて。三の考その詞ありせり

○こそよ

かくまこそよ 七ノ 六ノ

ふりしこそよ 同

わかちるはかくらなくしこそよ 七ノ 六ノ

思ひびらしこそよ 十四ノ 十五ノ

古今集上きにもおもふこそよ

拾遺集ふるとめでゆくこそよ又ふきめこそよ

なとかり

○こそやや[ ]こそ 下のやの係よ出　かこそ 下のかの係よ出　ぞこそ 下のぞの係ぬ出　しこそ 下のしの係よ出

○んのこその

四 なひ思ひもねぬ人をやりておきての後まで不孫のましなり[こそ]

こそハ注裳とよまり。校本におもくこそと訓るハ。上のやの結びなど誤也。おもひこそと訓べし。おもはんのこころなり

八 奥山乃菅の葉しぬぎふる雪の消ぬといはも[こそ]恋ひのしげく

十二 人みなおもふしゃにあそびてをぞ君がこひしきはかたがたならなり[こそ]

これハ将有裳とよまるによりて。なりこそと訓るハむかしこと也。なりこそと訓てハ。将字なまよるがめくなるとなむ。かく其例あり。おもふべきを不知とかくるとしるべし

十四 かくつかね佐田の苗のむら苗こそハ定をつみハいろふせ[こそ]

二十 よそにのみえてやまもち[こそ]あはれかくしつつ今こそ思ひおもひそ

[ぞ]

十七 春花のうつろふまでにながめば月日よみつていともまつらん[ぞ]

十八 ありながらしこよひそのまんなかにすぎずあきんあしとは鳴らなん[ぞ]

かくのごとくんぞとつづけいへるを。古今集よりこなたにはみえず

○もぞ

六 よりとある[もぞ]こふるらし

日 これ[もぞ]まかるらし

十二 あひそめぞえをまさせども思ひかくしるしる[もぞ]こふるあがきをかくま

もぞと清ぎていふを。古今集よりあなたにはみえず

○こそ

二 玉藻[こそ]くもれども今る川藻[こそ]かれどもえふるる

四 よのきく[こそ]なきらし

十一 立ておもひゐて[こそ]おもふるまでかぬれおもそもそもきいかしきがくま

こそかれこそは。古今集よりこなたのこぞのことは異よしぞしぞこそとぞとおのづからまありけるのこと

○ぞこそ

十 月がまちし秋をまちかぬまかれぞこそ秋のもな[ぞこそ]いまさらさびしける

十二 あえてぞこひなべきむと人をいへどえて後に[ぞこそ]ちひまさりける

十三 なこそを[ぞこそ]これにようちふるまにゝ[ぞこそ]なまふよるらし

十五 人よりは妹[ぞこそ]なしたこひもなくあらましなずおもひしぞへつ

そのこゝろ。ぞにこそを添へるなし。妹びそぞの格なり。此歌に何ぞこそなぞくらひしみて結ぶぞこそは古今集よりこなたになくなりし。三の巻ぞの部より出せり

○かにかくぞ

四 年経るづく今まさる妹をなからしまいづれいと[ぞ]うらこひける

九 長歌 いづくよりきたりし物ぞまなかひにもとなかゝりてやすいしなさぬ

十 わがまちし秋はきたりぬ妹とわれなにごとあれぞひもとかざらん

十三 年わたるまでにも人はありといふをいつのまにぞもわがこひにける

同 長歌 いかなるや人の子ゆゑぞかよはすもあごころし

十四 柳こそきればはえすれよの人の恋にしなんをいかにせよとぞ

同 たれぞこの屋の戸おそぶるにふなみにわがせをやりていはふ此戸を

十七 ほとゝぎすなにのこゝろぞたちばなの玉ぬく月し来なきとよむる

十八 いかにある布勢の浦ぞもこゝだくに君が見せんと我をとゞむる

右の古歌いづれも其何ぞといふ辞にて。ぞにて切てとゞむる格なり。これ古今集よりこなたの歌ならば。必かとはいふべき所なるを。ぞといへるは。むかしの格なり。古事記雄略天皇の大御歌に。これぞ大まへに。日本紀には。このまへに。かゝる事をも此ぞは。かくあるべし。

又さいはひ彼方の歌に。これぞ此中人の御心のかくちせうそこしらひとぐるや。又万葉集に。ながよくれぞつゆのまん。これも皆同じくて。かくあるぞ

の

○といふの

五 たえつゝのことゝふ久しくらひつぎとけらしみむまさりしきたしと

八 ほとゝぎすきなきとよもす卯の花のともにやこしととはましものを

これは卯の花と共にといひて也。卯の花も来ぬる也。又万葉集に。花もうつろひて白波のごとくに

右の八も同じ

○一つ乃の

六 長歌 丹つゝじのにほはん時のさくら花咲なん時に

十三 長歌 走出乃よろしき山のいでたち乃くはしき山ぞ

又やうにいへるのなり。長歌

○一つ乃の□

四ノ廿三　｜よがせこぐ往きの□まふく　同廿七　｜大ぶねこぎの□はしらふ

九ノ廿三　｜ますらをのゆきの□とりみに　同　｜父母がなし□のまふく

又

十八　長歌　めしたはきぬてぬく都は為れども故の かなしもうし

二十　長歌　山こそばこの とをしく川こそだこの さやけくこそ

○一つ乃の□

三　いなといへどしひる志斐の がしひがたりはこのごろきかずて朕こひにけるかも

十六　しなざかるこしは君の とかくしこそ柳かづらきたぬらくわそばめ

十七　むのづまりしうすひの山をこゆる日は せなの がそでもさやにふらしつ

こまつはのり□ぢやあれねいひかなあるれ。しぐくと従あまざし。さて本のまゝまて右の三首ほど古言は一つの格なり

や

三　海原はうむき秘風をなぶさつて君がはるしにある人もあ　へや

十一　あづさ弓未はちしらす心にとがりさる君がゆづるはぬんと思　へや

十二　まだもこや荷をはこすおいそれみ徳ぬる川のたしんとおも　へや

十五　妹が袖まかまて心さりしわりぬきど一日もわと年をへてお　へや

四　うれくりしまがきのもゞくえまくわりゆくんとい　へや　君をこふらそ

十四　うまりし粘やけふ小麦なましあさは君は君するをまれたる　とや

十六　長歌　なぐさむるころしわくばなぬざかる心あふ一日もなるべく何　とや

同　からしてもなひたるわの手をしわくと年月ふるは忘しけ　とや。と

九　かづけ物を人もあれやとぬぎ衣をきみにはやらなしのびのましに

十九　おやうくにあらはてをりからんその子なれやとぞ

件のへやきやハ。みなきのうへかゝる辞そ。おもへやハ。思ふとも思ひハせじといふ意。きやハ。見るとハ見せじといふ意ぞ。下にとの係れるも同じ　此格をなほ他集よりここにとりて。此の處のやの

註し出せり

九　さしへりし友をゆきやかへごろも霜もおかぬ山のしきむ人

四　君が代を人にしらせやもろしがあきさかけつと袖ぬらしつゝ

日　しほがまの浦のよそめのつぎ橋ふみゆきとおもへやいもが袖ぬれつゝ

十二　みだりごゝろおもえそおもとハかくむとらへ乳のめや見がおりくらむ

六　湯の水ありなくかしろハわがおもし妹にこふきや時ぞなく

七　わすれみてばへぬる後の年なきやまたもたくしなくのあふき

七　妹背の山のしたびにむつまじき妹の山をとゆるせやとてうらをしみさせ

十六　世中の人のながれをおもひそめぬ見しかきやとてやらせらん

これらハ皆やの上よりを畧ける例そ。ゆきやハ。ゆきぞや。ゆるせやハ。ゆるせぞや。思へやを思へぞや。こゝのきやハ。こふきぞやの格も皆同じ。下にとを係れるも同じ。その此格ハやの結びそ。どかのこる集中に此格のうちきやをはしまおほく　かゝる。

古今集よりここの家のきたかし　此の處やの註し出せるがおほし

二　わが恋のちへの一重をなぐさめんものあれやとて

六　玉藻かる海人のしほなれにかはりきる鶴にしとかきや氣色ハざらん

七　いそのかみ小野の秋津にたつをゝ雲にしとめきや時をしらん

あきしハかづあきと紀にてかしてやハ係る歎息のやし。疑ひにかゝるべ。日本紀衣通

姫の家のくらへりし見もあへやとえしといふも同じ格也。又後の家々と此格有

すべてものをきやせやてやへやれやきやめやなどのやは。今の本ハ訓を誤りて。

念哉とかけるを。おもふやとよみ。有哉とかけるをありやあるやなどよめるたぐ

ぞありし。よくてふ言はの格を正して改むべし。さべらかなるなどぞ。一
うぢの川乃瀬々きて。一首だにもなやまることし。かろそうなるをくべつれど。

○ぞや

七 たふさ海浜かしこくも置まつらし【ぞや】へるんあぐとはなしに

九 たらちめて見【ぞや】こひんきき夜しみなびく山伏念ひこえいわなで

これらのぞやを。たまへしぞとやとまちがへるなれど。後の言にハ少なかれぬなよ出せり○又古事記崇神段の言にみまきいりびこぞや。倭建命の段何にあづまはや。同段の言に其の大刀ぞや。日本紀允恭巻の詞にうら恋しぞや。みくぞや。雄略巻の言に。はしたくしぞや。はしたくしぞや。又仁賢巻の何にあがつまはや。あなにやしぞや。語の詞ハ大て欽明の辞に。仁賢巻なるを。何怜矣とかけり。又此ぞやハ万葉にもなし。後の言にしハ二つ三つ世の言のやの格に出せり

○とや

二 ことしハ【とや】やまみちこえかりみなん人乃えがてにせしふやきらふてこえまし

ここは加てまつよなどのかよと同じくて。疑ひのやにハあらじ。古事記顕宗段なる。ぬでゆらくもとや。又かきめかや。日本紀皇極巻童謡にもあやにくしかや。などみな同じ。

○やも

三 あふにして来【やも】いつく‖ありし雲はしる空むかし山をこえてきふなる

これらハ疑ひのや。もの添ふるなり

三 こまりくのちり川せをとめかてにまけるものハみぞにてなりといふ【やも】

四 うつきよれよ【やも】ぬさゆく‖あふをとる妹よいのちにてよがはちる孫ん

六 きのこ【やも】むなしかるべき‖万代にかたりつぐべくなをたてずして

あまりをはじとなる やものことなり

一 秋もだに乃ふるてら妹をふらはば人妻ゆゑにわがこひ【やも】

四 玉の緒をいのちにさしてむすべきぞ有て後にもいそがしき【やも】

此やハ。やそのさそて。きさらぎや。きくとふまよおくるも。

加

一　ゆこはうらにふゆの日のらんをあらぶ西裳のとふに堰ふらん　ら

九　衣手はおぎのはべをきゆくりわきしちぬると来ぬふらん　ら

一　志かさぬりいくごの鳴べにぐ船よ妹のきらん　ら　いつき鳴ま哉

八　文まけてはきつるそよぞ人つきはちゆくづらひらん　ら

二十　春波ろし袖さへぬまてこぐ舟のかしる程にあけあん　ら

かくのごと。らんらんらんらんなどいへる。古今集よりこなたはさ六そを

○ぬる

卅　むさうしはゆとぬる　ぬる　いもづこ乃はびて此日くらさん

二十　なれ今はなれき出川をしらぬさと人にかへらん思ひしはきえ　やど

十五　身にあらで一夜妹がいふ青墨も旅にまよひておもふかな　やど

七　春の木枝はなる松人はちくもりしかの母のいのちとはなれりきえ　やど

こきりのくさひんとらふべき本ぞ。をとなひて。やへはづけるハ。これいひくくなて辞ぐし。此類よ。しとよむべきなるぞ。今本にも誤りて。ひんと訓るおほし。正しく改むべし

○このほかにへやどきやどせやどなどいへる類を上に出せり

○きさらぎや

二　はるとらバつれてたづ流し佐保姫はうすのへのうきたるに　きさらぎや

五　梅が香はきつる巷はる柳をかげにならべくあまねに　きさらぎや

六　泊瀬女乃はなる本妹花みよし野の瀧のみなもとにさえに　きさらぎや

八　散花の一よはうちはりくるさのこゝろかはてましつえ　所　折　きさらぎや

四 佐保川のきしにふく浅瀬ぬでゝ出ける弱のくる夜ぞ常ありける。[ぬる]

七 やとの萩をうつしけむかひまつ月ぞかけやもてる [ぬる]

此るびのぬるハ。かぬるハふるし。けぬるハおとり。てぬるハてるかしてい
ふるまてこひおふまふおゝるとぞある

〇かると

二 石見なる高角山乃木のまゆもまさ袖ふる見いもえきん [うと]

十五 かつらきてえんと思ひし見ぬぞ秋萩をうつ花にきん [うと]

八 味寄いふるえて咲る梅花君がりやらむよそへてん [うと]

こゝも六上のらんうおんうなど同じる也。
下へかゝりのそかうきるなり

〇ぬると

六 人こなけ命をけふもみよし生の淵のそこいての事ある [ぬうと]

七 ぬぞうぬよりける月をおぐそんに西乃山べにいるぬらむ。[ぬうと]

八 出月のそのすがたひんにもおもふこころをきゝて [ぬうと]

こゝも六上のぬうと同じくて下へもの言ふなる。
こひ語るふるまうふすなり

〇ろかと

三 待みかりし花まひちるまひいや日をふかりける色見れバかなしき [ろうと]

五 神なかりかむさびいまにしみし有今社をうへにしふくさき [ろうと]

ろうとハ。ちるを紀座神仮仁徳仮雄略仮。日本紀仁徳紀などの歌にあり

〇なの邦に 見かと 口の書のかの説に出 こそぬうと 下の了その條に出

〇ぞに無ふか

四 おとてしは見ぬごとにある [う] 小山田の苗代水は中淀にして

十二 むかつる何らんといふこそ有る[ろ]あつる時さへおもかげ為せむ

此歌ハ三の句こそとあるからハよむべし。されど然訓ときハ催なれバふかしといふことあれど。かなぞにあふ太あるゆゑ半るめくあるらくよむときハあるぞといふ事同じ

○やふあふか

一 わがせこはいづくゆくらんおきつものなばりの山をけふ[ろ]こゆらん

月 ながらふるつまふく風乃さむき夜にわがせの君はひとり[ろ]ぬらん

月 よひにあひてあしたおもなみなばりに[ろ]けながき妹がいほりせりけん

六 すまのあまのしほやきぎぬのなれなば[ろ]一日も君をわすれて思はん

七 いにしへに有きん人もわがごと[ろ]みわの檜原にかざし折きん

月 むらさきのなだかの浦のまなごぢに袖のみふれて寝ず[ろ]なりなん

八 飛鳥川ゆきたむる岡の秋はぎハ今日ふる雨にちり[ろ]すぎなん

十 秋萩を妻りなきしといへるを[ろ]鹿をなきてそ花ちり萩ぬる

十五 大和にハ恋しぬらたて浜きよみまろふの浦にやどり[ろ]せまし

三 何しる人乃菱江のうしろにあさりする海士と[ろ]みらん旅ゆく我を

これらのかゝ。後の歌ならバみなやといふべきあり

一 とぶ鳥のあすかの里をおきていなバ君があたりへ見えずぞ[ろ]もあらん

三 いもゝ我もひとつなれ[ろ]もみかはなる二見のみちゆわかれかねつる

八 漕ぐふねてふねをすげしつべき其の海べにてもぞ[ろ]もまつべき

月 今朝なきてゆきし雁がね寒く[ろ]も此野の浅茅色付にける

これらもやはふかの。ものそへたるなり。後のあるなれバやといふべきところ

○志

○おほよそやもじ辞の志かど。□爰紫条子ハ詩ふきあぐしにもちくつらひ
しるそ。その中に後の家ふもいう格あるハ読よ五の末乃志乃紀り□しいせまバ
ちぶきそ語ぎ及今のごとさ来より古きくみハえしまる格あるかぎりを出さるも
〽家□しあぬぐや 一ノ七六 〽かり□いのしかりかゆ 同九 〽まち□見しきりしも 二ノ十
〽山□ううしたやをかうし見かうしさやきかうし 三ノ六六 〽山□しえぐ惜し 同六九
〽川□しさやそし 同 〽個□ふしかうらし 同六一 〽名□ひなきまうしまうりてありし 同
〽あ□うぶしあぐる 同五十二 〽私□しまるさん 四ノ六六 〽椒□引山の方にしかうらし 同六八
〽か□にしハあらんを 同三十 〽美□ふしえある 同六一 〽思□ふかし家分ハやせぬなきくふ
□し袖さへぬきぬ 同四十九 〽思□つりまくし面影ふみる 同五十四 〽ま□つとにしかうらし 同五十九
〽い□えふしこそらん 今十二 〽琴□ふし有べし 同十二 〽家□そしまるさん 同六一

〽う□へし神代ゆききめきかうしを 六ノ廿 〽か□とし□とのしも 同六一
〽ち□うん賂ふしありてたむきん 同六四 〽妹が□徒しおのあるかな 同六八 〽ま□ちふしまうらん 同四十一
〽ま□きれしまうる 同四十三 〽お□とふしきけ置 七ノ十二 〽お□りひし思へぞ 同
〽た□ま人しなきうちかうしも 同六十 〽か□きうつそくさし美たえしうも 同六十三 〽今□しくやしも 同四十一
〽志□ぐさ語しまあく語うし 八ノ四十三 〽美□ふしえつ 同五十 〽名□うくしようしも 同五十八
〽今□しちうらん 十ノ九 〽う□かまし誘人も 十一ノ六十 〽未□えしまうれ 十二ノ十六
〽母□しかうきても 同十七 〽裕□のくしなる為 十三ノ六十 〽お□うろしいうし 同
〽海□しうう見し 十六ノ七 〽法□ゆかくしえん 十七ノ十九 〽あ□かしえがふし 十八ノ六八
〽お□ひしまちてバ 同六八 〽名□そしたつぶし 十九ノ九 〽孫□し志ぬだるや 同十九
〽お□ひてしゆらん 同六八 〽今□しうらしも 二十ノ十三 〽若□誘人しおゆるゆるかも 同五十五

昭月ふしつらし □ 同 五十七
大かた志のおもし。猶これをまたおかり
又二つきそらるハ
今 □ □ □ □ しそし 同の 五十一 かくのこしこひし渡さバ 九ノ 六六 今をし □ しまさく □ しつらバ 十五ノ 六三
十二の表十二の此うた昭ふかし つきりかし紫ぞふく。こまハ下のし □ ハ志志のし □。助辞ふつらバ。
又十九の表十九の此うた昭見 □ せそもし。此 □ ハ二つ大ふ助辞又あしばらまハ古へ見るを
見をとらひちるませもとうふ二つなたものをそへうかして □ □ しとつるじきく。ささしきそ。
ゆくをゆうををどうふを。又きかし大ゆうし大そくうかせそがらし。猶まハきえしハくにきて
しいふ同じきうくなし。見しハとも見とゆるきじ。集中に見あふを見ゝしあふをといへ
ふおもし。同巻の四十二の此うたに。豊明見為とつるも。見しせまそと訓べし。

○よし □
あさによし □ つさもよし □ 芸麦よし □ 玉藻よし □ をしきよし □

○やし □
をしきやし □ よしゑやし □

○志も □
恋しもはふつまどども 二ノ十八 見えをしもいつもあらんを 三ノ 五十六
穂 □ しもつらむ 十七ノ 六四 香ふしもつきや 同 六六 昨月 □ しも見きんがふともも 九ノ 六五
なよし □ もちよしもいきてあるあやも 十ノ 六二 名をしもきしみ 同 六七
あ □ をしもまぐうしこゆも 十三ノ 又 人 □ ハしもみちてつまどしも恋えしも
おもくいませど まし 同 六七 いの □ ちしも恋ねぐさくはあらねども 同 三十
山 □ きしもつちふねにこと 十八ノ 十八 あ □ をしもつやうしるふさる 同 五一

○志ぞ □
禄のこしぞ雅く 四ノ十七 なく □ 日しぞおふき 八ノ 六四 ぬる衣 □ しぞおふき 十ノ 三
此外に此 □ しぞ思ふといへるつらりそハ古き
ふようりこそくみとおなう

○してそ

かくしてそ　うべしてそ

な

一 あせ山乃はしく　つゞれてつゝくにえてあり［な］こせ乃まさを

四 大ぶみはたゆひ結みし　あがいなば哀さこひん［な］うゞに逢よとふ

十 秋はぎのちりをだゆらは　さき荒そ見びなきせん［な］えゞみバこりしみ

十七 わかくぎ次あふちの桜り　ゆきてゐぞ花ハちらん［な］おとゝるまで

十 梅花散きともえしまで　ふる雪はいちじろきん［な］る伎やらぞ

一云 ふる雪ふまづひやらぞ　そきともらん［な］

七 哀わして哀さこもん［な］いまく逢はすてさがうへ　ふてらし月夜を

○んのとはな

聞きてもやえな 早 四ノ五十五　あそびくらさな 廿ノ十五　もあなく思へど 死 四ノ六八

いなかし思へど 日　ふかひてゆうな 六ノ又九ノ五十二 十ノ九十六 外本もゆうな八ノ又し　むもられまけな 八ノ五十二 十二ノ五十二

いざぬもとな 日 五十六　哀ゆハやらな 九ノ十　風まつりせな 日 五十二　わみちたきくな 日 六十三

豊はもそぬきとな 十ノ二　ゆえてみぐきとな 日 五十二　いでられきいうな 行 十四ノ廿七

見りてなつきな 十九ノ廿七　ありてかざゝな 日 四十八　忘もられあきな 十五ノ十　見えつむぬぞな 日 六十

さまみよみな 日 五十三　流とふつこれな 来 日　哀さむさそバな 日 六十　袖ふこきれな 日 六十二

いざむさびてな 一ノ十二　玉藻かりてな 二ノ十六 六ノ五十二 七ノ十四　かざしにしてな 五ノ十五

ふむきむてな 十二ノ五十七　袖ハふりてな 十四ノ十　みなうつそへてな 十七ノ五十

忘りしよなきなし 二ノ十四

此如きなる説日本紀のうちとりり。いづれも皆んと同じこと。てなハてん。なくハなん異さまふいて説たわれども皆かなえも。などなきんまへてん故るかなし。但しんぞこつらのまにも又他の文もまぎれていはれ。此なハうごふつくもかせんとするすにのとひて。他の文へをおしハかりつくかふやうのすにいて例となし。これんとのよかひめし。十七の歌に居のなり玉つれ沖ハ旅ゆきとそらぬ志を見ぞたまへなる。これハ他の文へかひて。なまハなんとこひ孫がふまましくり。例なきところなし八奈字ハ。尼ヶ年ヶなどの誤りて。なまむなハ行くずるなり。

〔志〕

四 山のそ開しのぢむくさまれゆくなれど夜ハさずし〔志〕をぱいつくるのバ

十一 多らち孫の母に志くらえ沈またりゆる心をよし〔志〕志がまふく

十四 かみつなる佐野かふくしもれ多毎し衣ハまさん〔志〕たらしこそ九

武かよし志やし志志やなどの志も此同じ志し。日本紀なりし志なし志し。重ねてもいう

〔い〕

三 いもへいへどかくまとくものくせこそ志ひ〔い〕ハまをせ志ひがくつとふ

同 玉妹をのまれども〔い〕。妹とむすびてしるく 九 荒条をとこ〔い〕。ら光あふぎ

四 まがせこう治ふくめく見あひゆかば紀の関ちる〔い〕。とどめてんかも

七 むつ川を渡りてつくの本志づえそり花まつ〔い〕。ゆく欲きつるかも

十 青柳の糸の細紗春風にしみだれぬ〔い〕。ゆふえせんこもがも

十二 いうらちがくありなぐさえてゆかめども然なる妹〔い〕。いふしみせん

件のいは。みな上の言に附て下にあり。日本紀のうまとききなのいくごいい笛ふきのかるとなまかつ日本紀の宣命の詞まとおほく見えてうり考へみるべし。然るを此いさうとびてなさじふいつる説あまれどもみなうらし

〇右のかに言の頭え発語ふある〔い〕なりしおうし。それハ今略きて出さず

〔ならぐのやをそ辞〕

〇ろ文ら。を助辞に添へる多し。なきまハ諸ふろりどおうし。又十六の卷

よ。そこのまりをハなんぞうらく。ふろなどハちらふそづらし

○かを上りおくるけり　かやらし　かぐろし　かあを

○たを上にある有　そをたちらと 十七ノ二十 日二十三　たかほり 十七千八 日廿六 日四十六 日四十四 十八ノ七

此たハ。ふやらし　たまそれてなどいふたと一つなん。又四のことくても立べし。四ても
だむをしそららきて曲子ゆくゆうのまかり。運字 将字などをもしるし。こぎく
こゆく。又くもしるそなどおぼしえしう

ぞを畧く格

あまごや　なまや　こひまや　ゆきや　しまや　のべや　ちまや　なかまや

ゆるせや　ちらせや　なへや

ことらハ上のやの條ろも出きるとばし
みなやの上まぞを加へてんれべし

おもへう 四ノ六十三 十九ノ十七　なへうし 四ノ十四 日六十 十二ノ六十三　ゆがらけう　わがそもれをのゆふてたゆきも 十二ノ六十八

こふまうし 十三ノ九　哀人のいをひまうねう 十四 六十三　あまうし 十七ノ四十七

ちまらハかの上りぞをかへてんれべし

哀人のいまへよろつらん 二十ノ六十八　こまハかの上に不をへぶてぞを畧るま光づらし

まよがこふまぞ 四ノ五十　かふごとつまぞ 十ノ六十八

こゆらハぞの上まぞを加へてんれべし

天地もよろてあまこそ 一ノ六十三　おみづまこそ 二ノ十一　まま　のくせこそ 三ノ十二　こまをのま たこし とよむハ誤りなり

かくちなまこそ 四ノ六十七　おもへこそ 四ノ五十二 十七ノ十六 十二ノ四 十六ノ十八　いろうつまこそ 十ノ六十六

ちりの人まこそハ 十七ノ六十一　ちうまこそ 十八ノ六十八　ふる言乃ちへにつめこそ　ことれ立うそらめ 十九ノ六十三

こまらハこその上りぞを加へらくまれぞし

右のごとくぞを畧く格。をせてねへそまの下。やかぞこそ の上まし
かぎまつることし。いづまも後世まハ耳なれざるいひざまなるなり。ふうのなこうくハ
訓を誤まうなうたり。古言をよく見れまへて定むべし

なにあふゆ　えにあふえ

孫のこしなるゆ 五ノ廿四 十五ノ十三 廿四 十八ノ五十七 六十二　おりそぬ人の夜ゐしねらゆる 七ノ廿三

おもしぬねぞゆ 十九ノ十九　見すらゆまじも 二十ノ五十五

かくゆきぞ人をいとえそえかくゆあれば人にしあくまえ 五ノ十

見らふきらえぬ 同 二十　稲乃でふりをすらえぬに 同 六十六　きびしともれそ

まきらえぬかも 十三ノ十　いの寝らえぬに 十五ノ二十 廿三 六十三

あらよそ後世に。らる。らま。などいふ言。万葉に假字に書る所ハ。いづれも皆右乃ごとく。ゆ。らゆ。え。らえ。などのミあて。らる。らま。などくあるハいとくまれなり。古事記日本紀などの古言ども同じ。然れバ所泣所知所忘所偲などく書る所も。なかゆ。なかえ。しらゆ。しらえ。わすらゆ。わすらえ。しぬばゆ。しぬばえ。などと訓べし。今の本にこれらをみなゆえるを。あきと訓るハ古言にうとくころなるべし

よにかよふ格

らましを略く格

見ましかば 十四ノ九　うきうしよかば 同 十三

これらかりきといふべき所なるを。らをはぶきて。かりきといへり

なかまごと 四ノ卅五 十七ノ廿三　あしきど 五ノ十 十七ノ廿三　あかぬむなしきゆきよきど 十五 廿

ながきぞ 十七ノ廿六

これらまきど まきぞといふべき所なるを。きを略きて。まど まぞといへり

〇えらん　えらと

これは後世の格をもて思へば。えらん。えるらとの所をもちらがへし中めれど。さるハならひ。すべて万葉にハよみな。えらん。えらとのいひて。えらん。えるらとといへるハ一つもなし。これもよりもらいふべき格の云あれど。此のまもを略ける格とハ同じからず。十四巻十一のうたに。つてゆるしをといへる。あらしも同じ格にて。後世ならば。しもあらしといふべきを。あらしといへり。えらん

二 秋月てらさむ時君べりしなくちのよなれかうぬけむしおろを

七 ちの川をあたらしかふ岸におちたぎつ流をさやけくえぬし我を

十三 あし引乃山より出る月まつと人にハいひて妹まつ我を

日 君がいのちも時ぞしほしきいつもながらよくもる人をとらふバかりを

二十一 あらき風ふせぐ我の袖をいのりつきをみつらふ我ハきみにしを

三 七言 ちる月を かもが崎山乃うら

十 なつ人わすれぎれを や そでつしく今やながら恋つきれむ

十一 をとめらを袖ふる山乃みづがきの久しき時ゆ思ひきつ我ハ

日 まちえてるさ子年やいぬるいなを うとむや志かなし忘まちかてり

十五 いのちをしまたくしあらばありぎぬの有て後にもあはざらめやも

右のをハ君をもけくる辞にて。よくならまほしく。此の歌ハ十のうたに同じく。このをハ汝と吾をとらへてある也。吾をといひてとも同じく。汝へもをといひてし。併乃よに似たるをとハかたわり又七の歌十一のうた。十時書本のうたに無るせをとよやへども見し。此をハそなハちよびかけなるべし

みよ無ふかり

十二 うれしもこれにおもひすべなかり しほやき船戸をさをバふみなる勇かも

十七 わがせこにこひすべなかり あしがきのほかになげかふわれしかなしも

こまつる術べなかりハ。術べなきといふを無ひて中々ちりさて中等より辞也。無ふがるくらふて見がり。かなしがる。恋しがるなどのたぐひ也。此がるがりを本一つなや。恨しがりがるがりハかなしびと他の心へをいふ時の辞。ちつのがりハみづからのうへをいひて。自他のたがひをいまど。またハかならず見也

だに無ふに

不知をさびしみといへる我がし。ちなみにいても。見えきどあかにきん十七ヘ さびし

もしありにく 日 六去 さまつし我也

[ねば]

四 はろばろに思ほゆるかもしかれどもけ長くあしかれば雪もいまだも来[ねば]行かぬあしかかるゑをまつがかなしさ

同 ゑまひつついまだ時ふりつ[ねば]夜月のごとたわわに見ゆるきよく

八 春雨もいまださらなれ[ねば]かりそめぬよき日は里にうぐひすのなきつ

同 卯花もいまださか[ねば]ほととぎす佐保の山べにききとよめきを

同 秋たちていくかもあら[ねば]此ねぬる朝けの風ハたもとさむしも

同 秋田かるかりいほもいまだこぼた[ねば]かりがねさむし霜もおきぬがに

同 吾が宿の萩の下葉る秋風もいまだふか[ねば]かくぞもみでる

十 一とせに七月七日の夜のみ逢ふ人乃恋もやま[ねば]よハふけゆくも

同 天川あまやころ里君が手もいまだまか[ねば]よのふけぬらく

同 秋萩の花のちらひも過ぎ[ねば]ちる萩の恋ハつぎしこそまされ

同 行き山乃このもいまだもみぢ[ねば]ろふふす今夜ハ露もおきぬべし

同 まれむくの松にもいまだくるな[ねば]小松がられゆ妹をながむる

十三 人多りよばひに行きて大刀がをもいまだとか[ねば]さよぞ明けにける

此ねばハ皆ぬにといふ意也。古今集などにもまれに此格有りてそれハ上にいまだといへる物也。△の詞を待つる事に思ふそのさまふくめる

十 さねそめていくらもあら[ねば]白妙乃帯こふべしや恋もつき[ねば]

此歌八日ドねばを二つ有て二ツハいまだ此ことをふく意り 十の巻の十八の丁にかみぢにたく恋の心にもいでども思へど 此歌もいかのさまなれバ其の格をよく見し給へ

[ずば]

二 かくばかり恋ひつつあら[ずば]高山のいはねしまきてしなましものを

同 おくまりて言つ行る ぞバ おひえりんそれくなるにちえ少へ女が努

同 乞ひとしに言つ行る ぞバ 秋萩乃咲てちりぬる也にあるまじを

三 中くり人も行る ぞバ 酒盛に初老しがも酒にしみたん

四 おくまりて言つ行る ぞバ 本社宝の妹背の山にあら弟し物を

同 かくばかりも言つ行る ぞバ 岩本にも取らまし物を物ぞえだして

同 よそにゐて言つ行る ぞバ 志が家路池にもむちに鴨よ行るほどを

同 子が思ひかくて行る ぞバ 玉りもが倫とくも妹が手にまかれなん

十一 かくぞかり言つ行る ぞバ 取り月に妹が宿むらんつちにあるほどを

同 わぎもこに言つ行る ぞバ かへこも我思ひみざまて志ぬべきものを

十二 中々に人と行る ぞバ くやくにもなるほどし物を。おの独ぞかう

同 たくまぬて言つ行る ぞバ たごの浦のあまならまし玉藻かるく

同 いつまでにいらむ〆のちぞおもふくハ言つ行る ぞバ 志ぬるまされと

八 秋ちりのことにあきぬる志らず哉きりも志ましき言つ行る ぞバ

十 あき萩乃枝もそぞにおく清白の露かも志ましき言つ行る ぞバ

同 秋の穂を志ぬにおしなべおく露哉露かも志ましき言つ行る ぞバ

十一 清るぎぐちゆるそ我らへみゆきぬまて志せぬとも志らん言つ行る ぞバ

同 ちみのえ我はちかぞき我らけのものうかきらゆらん言つ行る ぞバ

同 玉信のきよする浪乃あり君にも行る倫し物を言つ行る ぞバ

三 志るし我き物をおりそ ぞバ 一杯のにごれる酒をのむべくあるらし

六 たくまぬて我ごとひせ ぞバ 浄実生我ら先の世にもなるほど物を

八 山しげき里りしもの【ぞバ】秋なきしるふたゞびていなまし梅を

十一 なかくにおもひしらひ【ぞバ】浪の浦のあまのかりほを玉藻かりつゝ

十 老ぬ乗ば志にむかひていきる【ぞバ】咲て散ぬ花のうきをまし

右の哥ぞ皆一つまゝそ。んようるとらふことゝ。是つてうるぞだハ。是つてあるんよりハゝ。おもそぞむハ。思んよりハゝ。かもこなむずへし知べし。ある毎ありるハ、ろ哥ともども。いづれおもこそ右のやう証けて心得るときハ。一つにつゞきて。一首の趣もみないと明らかなり。又八の歌の今にむかひ思ん中ハ志が此秋のかぎりにもぶん思ん中とく。是つてうるぞぞと同じことにて。一首の趣も。ぞぞしくよめる右の哥ぞもと全く同じ。此をおかふべし。然るにしかるもく此ぞぞの辞をんたらずて。ろうごくの説あまぞりど。古でふ、ききとかえりて。一つにつゞかねば。明らかなる説あるまなく。一首のをとゞこなあなやうなよぐにもなや

【ぞ ける】

【ぞける】【ぞけれ】【ぞけん】

猿志ろくぞける 三ノ廿二 六ノ廿二 八ノ廿七 日五十七 十二ノ十八 是やまぞける 十七ノ廿三 見えたゞぞ行くぞける 十八ノ九

まてども志ぞける 四ノ三十 いまさかぞける 十ノ廿七

いはくえぞける 四ノ廿七 あらそぞける ナノ五十九

かゝめりそぞきん 十七ノ四十七 ほきでこぞきん 六ノ十六

これハぞけるをぞけるといひ。ぞけんをぞけんといへる格也

【○○○けゝんのこのきん。】

是しきんらし 三ノ廿六 さぶしきん 四ノ廿九 是のしげきん 七ノ廿一 あくれしげきん 日廿九

きなバをしきん 八ノ五十六 船のとやきん 九ノ廿九 身ハなげきん 十ノ廿一 ちるぞをしきん 日廿六

いちぞろきん 日六十二 うしがなしきん 十五 四 きかぬ日なきん 十七ノ十 志なバ也をきん 日十六

ちかる日おもきん 日廿九 あもあるきん 日四十二

此格古き集よりこなたにもまれなるを。さいつごろ御者にあふよきんなど行るもこまし。又右の条に

八 こひし【を】ぞ船の何せんとゝ家やどふう志し当なく今咲りける

十一 今だにも目なともしめそあひ見ずて恋ひん年月久し[き]まくに

十九 天雲をほろにふみあだし鳴神も今日にまさりてかしこ[き]めやも

あまくものをもかりのまゝにて。恋しきそハ恋しからんぞこ。久しきまくハ久しからまくし。かしこきめやもハかしこからめやもにて。此かくをきくといふ同格也

| こそ | こせね | こせぬかも |

夢にみえこそ 十ノ六十三 又ノ十 十ノ十三 同六十 同七十五

うめが花ちらずありこそ 又ノ十八

照りうかべこそ 同 十九 ぬる夜つぎこそ 六ノ六十八 あそびのみ(飲)こそ 同 二十九

恋につぎこそ 七ノ六十三 まさきくありこそ 九ノ三十 夜さらんにふりひこそ 十ノ六十一

いもに逢こそ 同五十七 同五十一 十ノ六十又 同四十 十ノ廿六 …をバうつてこそ(打棄) 十ノ六十八 やまびえてこそ 十二ノ十三

はやくゆきこそ 十二ノ廿五 古事記神代の上にも。こせねとも見え。こそと同じ

件のこそハ。集中に與許(コソ)社(コソ)欲得(コソ)欲(コソ)などゝ書り。此中に欲得(コソ)欲(コソ)などゝ書る所をバ。今の本ミな訓を誤まり。又與ノ字を書るも。訓を誤まる所あり。又有社(アリコソ)をありこそと續(ツギ)

許増(コソ)をつぎてこそと訓るなども皆ひがこと也。又の巻の歌に阿利(アリ)許曽。十四巻の歌に奈保(ホ)此與(コソ)とあるこれらを證として。いづれも此格によむべし。六の巻なる飲與(ノミコソ)を。のみてこそ。十二の巻の去欲(ユキコソ)を。ゆきてこそなどゝよまんもひがごとなり。こは板本の訓を徒いうしくまれなりし。そハ志ばしくおきて。今ハ訓を改めさん。後の人のとめよおぼろかにおくこと伊勢物語の歌に絶間なくとつぎこせとあるも共此こその格なるを。同じ意なり。此歌を誤のこしとくんぬるは。古へをしらぬひがごと也

ちるなこそゆめ 八ノ十七 同廿 同廿九 同五十八 十五ノ六十七

恋ふるそにあひなこそゆめ 十二ノ七

絶(タユ)るゆゑとふことなくありなこそゆめ 同 五十四 云

なこそといふを。禁ふ辞なるを。なこそといへる。まさ勿(ナカ)れと禁ふことはなることあ

行ありこせぬかも 二ノ二十五 又ノ十四 六ノ六十七

こは八上の如くの條に出せる。ぬるぬかもと同じ格そ。ありこそつぎこそといふと同じ。こせぬかもとよめる。其の外にもおり多かり。又今本訓を誤まるも有

いそぎこせぬかも 十ノ五十九

| がね | がに |

三 ますらをの弓末ふりおこしいつる矢を後見ん人はかたりつぐ[がね]

四　佐保川のきしのつゝきの小歴木なかりをまつても張之来者立隠［がく］

十　梅花これそちるまじ春雨よしなしいぬる人乃きへつらる［がく］

四　るもちなる物をやし城ろえん郎ふ清に見までまみ渡る［がく］

四　何し引乃山田つくる子むでそとも志めぐふそへとめると志る［がく］

四　あきつ羽りふふつる衣られハきじ衣ふまださば奉よるもきる［がく］

四　雲はむをはきさ八さかなそうめ物茶よし比でろそをても何る［がく］

十八　志ら玉城つみくやらバ何や見茶花しらちなる茶何へとぬく［がく］

十九　ほそぎ波きけた何くそあくどうにそりてなつきながしになく［がく］

十二　里人もかくりはぐ［がく］よし恵やし来てもまちんじがたちなめや

又　よう川よふいひつぐ［がく］とえく

十七　おとのとも右のとも出てかりし物る［がく］

八　秋田かるろふもいまごろおさねなかりが意し露もおきぬ［がふ］

十四　たかしろに堂をばなやきを物る茶にふひ茶まづ足おひバおする［がふ］

四　ゑが屋戸の夕佳茶物志て巌乃きぬ［がふ］りとなおりくめる加と

十　うれしきや志とほそぎきも今こそ八都のかる［がふ］きさなれよまめ

四　秋づきば見茶物なのいそぬ［がふ］おかへど志てじとゞに堂ざればバ

十一　さ康ぬ［がふ］そたまともと孫めどかきつも物なびきし志が去ま川は衣を

十四　むろがやの清るのつくみのなりぬ［がふ］志ろハいへまいまぐ孫なくに

八　おかるもちなる玉りしぬく月を近くいそぬ［がふ］花咲ふれ里くく

十三　何まきとえくがうまがせるむまもてる［がふ］えく白妙の袖なる見てつゝし

上件がは。は中昔の文にきこえたるが。坊がは。むこがは。博士がはなどいへるがはと同じくて。かはてその料にまうけてもちふること。又ふくろがはふところとぞ。孫にをつてすてふといへるなり。がはとも云ふ同じこと。さて中古仮字書の例にも加へては両書の我をうけたれば。かなふべからざる辞なるを

さね

かやをかるさね 刈 一ノ十一　なが名のるさね 五ノ七 九ノ十五　秋萩の花をふるさね 葺 十ノ廿五

たゝしぞゆるさね 十二ノ四十　ぬ孫てゆるさね 十四ノ十　むともむすばさね 日十五

せなと汝まさね 日十六　桂をふるさね 十五ノ三十　玉ゆぬるさね 十七ノ廿九

ゆふをくるさね 十九ノ十一　さうえいまさね 日十五　楷川きくさね 日廿一

おやりませさね 二十ノ三十八

此さねは。まづ萱をかるといふを。かる孫といふ。此孫は後の世にもよむていへるを。あの世の孫の叙り出せれども。てには出さず。さて又かり刈るを古今集は刈るせなといふなのかるせまりの。かり孫の例のごとくに孫を添ていふときまゝ。かるさねとある形。雄もこそなどへてまさまふべし。然ればさはせのちかく言。孫はからねのりね

などいふ孫と同じくさねとつゞきたる一つの辞にはあらざれども。かくいふ例は古今集よりこなたには見えず。ゆゑ別にこゝにいふ

そ孫

遠干なゆりそね 二ノ四十三　岸べの秋をなちりそね 日四十　紫なかれそね 七ノ廿六

盈なふりそね 九ノ九　なふくそね雲る 十九ノ廿一　雪なぬくそね 日廿二

なふきそねをし 惜 日四十七　浪なきよそね 二十ノ十九

こまはつゞきはそこのこゝろ不死を。こゝ下に孫を添たるなり。

中学嫌とうきる

両なふり行年（そね） 三ノ廿三 十ノ廿　風なふき行年（そね） 七ノ廿四　太なきえ行年（そね） 十三ノ十六

あまりの行年を今の本にはなこそと訓たり。他にこそを行年とかける例なく。又上になといひてこそと結べる例も他にはなければ。此行年は決てこそにはあらじ。たとへば挙けるその核と全く同じければ。こまかくと必そねと訓べきなり。行はゆ。年はね。所字などの誤りかともやいへらん。文字はまかへはいはずいふなとおもひえぬをも

との

ゐ　よがりそる三おもふよめるゑりちて流布てまし【なの】今ぞ梅しき

ゑ　はまえぶやあうもがもやみやこまでおくりまをしてとびかへるも【なの】

こまつのなのハなのきといふこと。ちる池履中紀にあみあちてこまいとの。文雄
男履紀に何まもいかちとがもまきてゆるなの。これらも同じ

十六　ちちす葉はかくてそはる【なの】おきまろが家なる梅をうゑとの葉よあらし

月　あにつきふかぶしかく【なの】牛ふてそ鼻縄をくまえく

あまつのなのき。ともあきとらふこそなり

【志て】

三　よし野なる夏箕の河の川淀に鴨ぞなくなる山陰に【志て】

月　みおりごはもひさかたのきよひみふぶのこぞはがなく返りに【志て】

ゐ　ちくでしハながこふはるか小山田は苗代水はよどまずに【志て】

十一　いせの海人乃はさなゆふなにかづくちふはちびの貝はかひなきひに【志て】

古　むろをし渡るなしかはてあろのゝ妹がまやあそてはこくに【志て】

こまつのふしてハ。ふてと
ふさうりおなじ

三　あかしこひしことをべなくはしらずの孫のこしなる敷よしひに【志て】

十一　あろなへ乃まがあろもでふなハおきぬ妹をもはちかへなたびに【志て】

三　みちのくは吉里のゝやふえけども思ふ頼に【志て】見るとふものを

八　あをわくきよくてりなる此月夜又さらしに【志て】雲あたなびき

これハしらにといへるにてあひたまふを志てハ添へたるおなくなり

【志く】

ゐ　夜のふけゆくまが出てくればわぎもこが思へり【志く】しおもかげにみえなる

七　今[しく]もみめやと思ひしみよしのの大川淀をけふ見つるかも

同　住のえの名児のはまべにこまたてゝ玉拾ひ[しく]つねわすらえず

同　わがせこをいづちゆかめとさ竹のそがひにね[しく]今し悔しも

八　秋の野のをばながすゑをおしなべてこ[しく]もしるくあへる君かも

十　こひ[しく]はけながきものを今だにもともしむべしやあふべき夜だに

二十　たか川宮はすゑにありしきをおもひ[しく]のおほからむ八見つゝしぬばん

十二の巻九の所に唯毛とかけるを。たゞしくもと訓り。此訓よろしからバこゝもしかり。又廃帝紀の宣命に。令之（シメシ）。しく。応神紀にも孫しくをしぞえし。なかもしかり。紀ノ間方ときこの之紀もこのしくと通ひてきこえたり

[ほり]

同　月夜には門に出たちゆふけとひあしうらをぞせしゆかまくを[ほり]

同　さをかきあじろはちまるりのうたにさりぞまつらん君が見まを[ほり]

此歌おやのめをほて嬢のめをもり妹が見をまもりあへる者

[く]

三　もゝしきの大宮人乃まきる川ふなのをとこきん年のしるま[く]

同　いそ見るたちかへるもがとおもよるは見ふしゆきバちゝべのしるま[く]

七　袖振川なげてみぎはをまくれてこれ瀬の音のさや[く]

八　ゑる山の菱紫しぬぎふる雲乃きぬといそとおもふのしげ[く]

十　ゆきまあらばあまやこ浚あがまもいまだまつバよのふけぬら[く]

十九　あしびきの山のもみぢ葉にしづくあひてちらん山路を君がこえま[く]

こえまくといふ上よりのつゞけくとよぶべし。此格集中にあまたあり

二 みよし野の山松がえハちりしたりとも君が為にちよかよそ〳〵

三 みわたせば明石のうらにともす火のほにぞ出ぬる妹にこふらく〳〵。

十 何む思ふずあまりうんこゆゑものをおもちだ春日をおもひくらさく〳〵

十一 あしびきの山田もるをぢがおく蚊火の下こがれのみわがこひをらく〳〵

四 世中しくるしきものにありけらく〳〵。恋にあへずて死ぬべき思へば

月 春野をいやしたふるふそのないまださらく〳〵いとこひしかも

こはらくハ上ノ句の。といふなれど。とあり

らく

おもふらく[ ] 成らく[ ] 来らく[ ] あへらく[ ] さぬらく[ ] 成らく[ ]

行らくも[ ] 三ノ十六 あかしつらくも[ ] 四ノ十二 くるしく 来[ ] 同 五ノ四十七 ちらく 苔[ ] 五ノ十八

ふせらく[ ] 同 七ノ七十六 あるらく[ ] 臥[ ] 十ノ四十八 かつらく[ ] 七ノ七十九 よのふるらく[ ] 同 四十三 成ぬらく[ ] 八ノ四十三

思ハしむらく[ ] 十ノ 垂 とくらく[ ] 十三ノ九十六 おもふらく[ ] 十二ノ四十九 来ぬるらく[ ] 十六ノ 三十

かづらつらく[ ] 十八ノ七十七 いづこもふを返てらくといへるに。次あるも同じ

あへらく[ ] 十七ノ五十四 六ノ八十 まさらく[ ] 十ノ四十八 まさらく[ ] 同 五十四 たつらく[ ] 居 まさらく[ ] 十三ノ十四

あるらく板本ニ訓を誤れり。あへらくをあへらく。くふらくをふらく。ゆらく。まさらくをまさらく。まさらくをまさらく。辞にて。行へらくハあへるといふ詞にきを。あへらくとて訓て。皆思ひがたし。まべてらく八ふを返すくらくるハわれに。又そらくハたてるといふと同じきを。ゆらくとて訓て八。行あるといふにあたるを。まくあるの意にて云ふるあるを。ゆらくとつるといふハいふ。またらくへくうれたまへるべし。かくあるにあらぬ。大かたハ此を意ふるにいふなれバなり。

まく

きまし

きまく

ふらまく八後 十二ノ十二 見まくと思ふは 四ノ六十九 ふらまく思へど 十七ノ十四 恋ひまく思へど 同 十七

見まく欲り 十一ノ六十三 寝まくまくをえん 同 五十五 ちるまくをえん 十七ノ四十二 見まくしもよし 同 四十五

しあまくのこゝろ 十一ノ四十二 こひまくとおもふ 同四十四 まちにまくを 十三ノ三十 みまくちゝきん 十六ノ六十三

しがらみまく 十九ノ六十一 しぬみまくハ 二十ノ十三 たぎまくは 同五十三

ならづともまくハむきをのべたるなどゝ知るべし

まする

三

長歌 角はふいはほのそこ知らさらば ゆききん人の思ひつゝまひ きまし

そうし今代えしたゑしとおもひて かよむきん心をバそうし

ひきましバきんとらはさこし。思ひつゝまひきんやうハえしし。その思ひしるえをいひつら孫てがくのふくして今代の義じと思ひてまひきんといへるし。きうしとんと同こゝし

十八

長歌 ちしたよし我のつえもこともよひふあまくあまんばかうちなきき

かくり きまく そうし

これもきまくハきんを延るまでなのきましと同ドころぞへあつくハ久の字をあれバ。めしくハ之の混そ。これもきましにてをかんらされどむを迎てまくゝ

いふとつそあれバきまくるそことよろしかれし

文章の部

○てにをはハしもの句のもの心ぞてるぬ何の道のくハぬるをのへ

なくしなに物とや思ふらん後世人のみるゝ物をえてふ心そぬてこの心を

おもかるをとくむくのへと。句のこにそうらば。しかぬこそぞふをとあをよ

さみなさざまりうるあとそいすしへ人のそあかうにしぞ一くぞう出

ぞそるゝ物までとだがつるふしハきうにあしたのづうらみあしわるがゆゑ

あるまで。その心ぞまりハりそうゝあみてふをえしむう川ふてたひぞのこ

ぞ乃もさみじかききぢとゝそあさ。上下待そくのへそいさうゝとさく

なるとぬし。いづくにまれ徒の切てそゝろをかあうバ上乃てふをえ乃

かて皇挑まりうて。□□□□。□□□□□□

ひなど。おほくぐさの法ざまなどと同じけど。さびりしむを法くべきなの
ありたらひ文章などの。ことごしくいふぞうらは抽子とよらで何となく
しなびたる。ふ一くぶりかへむさの紫なりとも。以てふをはぞうらハみぞうりふ
きべきにあらず。いさくらとたがるふしみしるハその人の抽がく年乃。
大かたこのつくなき思ひをかうさて。んおさりせし諸くハさりかしれまざ
なしらずや。かくていま此るをいふ。まづ始る文字ハ。延喜式の八の巻に
集え載せられたるあまたくの祝詞。また續日本紀などの諸代々の
宣命の詞などのまつりごとるに言ひ代々さがひて。詞
のふるてそうぐしにふるめかしけれ。てふをそのことのひとつりそらふると略
しもりとバ。今則ふ八雲さい。京本の京本なりての歌の集の序は詞。そ

しがきなど。又抽記日記など頃一つ二つ引出て。たむをさうん抽ぞ。

古今集序

〽たけきもののふのこゝろをもなぐさむる[は]うた[なり]
〽なりひらは其こゝろあまりてことばたらず[ぞ]
〽小野ゝ小町[は]いにしへの衣通姫の流[なり]
〽大友黒主[は]そのさまいや[し]
〽こと[は]君も人も身をあはせたりといふなるべ[し]
〽此歌[も]かくのごとく知るべ[し]
〽天地のひらけはじまりける時よりいできに[けり]
〽また山部赤人といふ人あり[けり]

早川ふむらふらなる[き]

まてく人よむ人おふかし[ぞ]

ゑりかゝる女を見て徒よん哉うごくれがなし[し]

右もさも徒のかゝりにて皆 徒の右の行の辞也

よろづのことは紫し[ぞ]なまり[ける]

かくて[ぞ]花を見でことまなくふなりに[ける]

かうはうとにもかく[ぞ]あるへ[き]

御きるはいちれとなるよろこびのと[ぞ]いふべ[き]

[いづき]ろうさ哉よあまり[ける]

右ハぞのや何のかゝりて徒の中の行りはちとぞし

上件の語どもを見て。文章はてにをはの歌と全く同[き]こ

と哉さとるべく。又うたがりぬほどをもとむべきなり。

[なん] 此なんをふるき文には おかよそ文章にもなんとかゝりてふきそおもし。そ
こしな奈毛とらつ

といふべきところを好みかなのどをでいふ辞也。さる故に結びも皆ぞと

同ド格なりこれ八ぶにそをさしつらぬ辞なる故ニ今はふ例をいはず。

そのあいだ思へるかなふべし[なん]あり[ぬ] きはる本の人まろ[なん]

ながむとも思ひ[ける] なるしのと[なん]おもし[ける] えぬる所えぬと

てうらかひふ[なん]あ[ぶ] よつの時九月に[なん]あり[ぬる] 此ぬの時は

あつるを[なん]よろこび[ぬる] こえてふてんはべし皆ぞし同じむすびし

古今日記よんあるものハそうぞぞなん来なる。こまふぞとなんとを いまはおなるみ例なきとも有り。估なるべし。一本みえ

又なぞらへの月花なり。何ぞれにかなんぞあること、もとをかりて言ふは後のあやまり
なるべし

今の世の人の文として書く故ゑに此かなの置所をも誤り。又其結びの
辞をもみだりにして、そのしぬがあやまちハいふぞや。おき所のまがふとハ、かなとへだ
たるといふを、楳かな人まろハ哥の詞につかふかなを、たゝふるといへるを、すべての流のことゝ心得を今の人なその
おくべき所をおしして、みだりにかくまくふその事を人まろかなといふハ、哥の詞につかふる
て人まろをえり出て辞とし、結ぶるを詞につかふかなといはぬハ、人まろ時すをいふとて、あの詞につかふるなるを
よしをえり出ていふなることを、すべて見れば、かなの事こゝに準へ知るべし

又後のたぐひを思ふおくる事も多かり。然ルに敏行朝臣の歌にも、詞ハまさし殿上ゆ
るされたりしる時に見し何ぎくまで流るゝ事か かん などのぶし。物流ねど
に此格あるに於て、ことにもそといふ同じきことかんハそこていかんがなし

日本三の詩歌書

ふるさとに来てらに乃る日よめ る

春の花に又まで加て来るをよみて る

ふるさと作りまし時よみけるなれ る　梅花をてつて人りおく
ゆるゝ 此なるび。上よそのや何などの辞なれど。よみぞるおくり
ゆるといふべき格あるに、つといひぞして笠るとりふハいふといふにをすべて事
の本出ハ、ちゝ詞へかゝりてむ梅あるに常の流のちぎりとハ異にして語ハ
切れてもことハ切ずして、やがて詞へつゞくゞ。ことの時よみる詞といはん
ぶし。結るを流の詞句のごとく、又といひ切てハ流もことを流く切れて
詞へつくらざるぞ。これハ条詩詞のもし出のこゝにも同じるべし。すべて物流みなど
まても何までも詞へつく仕所の詞乃下ちぎりハ皆同じるもの。古人の哥よみなどとぞ。人みてやるし。

つゝハし　なども同じ格なり。又屋元の頭などの詞を截する詞ところにふくろの字のちるを
見ゆる　花の色移りかけるか。まりなをきて、猶ありほせるなどあるも同じ格あり。飽るふまさ。
山里に都も鳴るを。雪ふり見の来たりける。春山をこえるを。女の来に男いでてたてるなど
もあるぞ。かるきりし写し深まてるみやこともあへど。さみハあしこでかくよりかくあるぞ。終の詞をさる

も同なとハかくもいふべきを、しかすべてのあはれをしらぬか、又離別部 から衣たつ日ハきかじ
るハ此格をよろしからずとしてかくハ改めるべし。
あしのあはれなのほどに。此よるハ何る人よしよみてつかはし[ける]と上てぞめや
何ともいふ辞なくて。けるとぞあるこれをもしあはれなりける。
いひくハかりてよろしからぬをよくよみて読りしけるあしとや
ふ。下へうときをつゞくる意にて。けるをいひてハよろしからず。さては
ものおのづからあはれをよくきこえてばおのづからゆるかなん。

土佐日記

をとこもすと[を]。といふ日記といふ物 門出[を] ことかきもすゑぬおくり[を]
うまのはなむけす[を] 卯の時ばかりに船出[を] こぎもしてかへりと[を]
右のとぢめのをを。今の人ハおほくはるといふべきを。上よりのや何の辞なくてハをるとハいへるなしとあり

あしかきつ[く] 人くたしとこそおもふ[く] 海ぞしおひくといふことたえ
をきこ[ゆ] よ孫海なとく[ゑ] みなく人は毎い[づ]
右のとぢめも上のをと同じ格なり。今の人ハおほく。やまつるを。おくるひふくを引ぐるひよる。おひを。おひやる。ありしゆをきこゆる。云るを云ぐ。云所をいへるとやしり
いひてみるにむかしもありよくふしてかくへきしさぞ
今かく此日記を始めに出ていふぞ。旅路の日記などかゝん人のんために
よくなるし。又右の格をあはれ人のよく係ることをわするゝなふそちりぬで出さつし
後世兼好法師がつれ〴〵草に。なづらひせることとて係るまゝなれ。かぞうの冬なり
てハとびあることゝおもへれん。われるそときていまして。入り海をくむるとて。これら皆
右乃格を誤まり。なづらひせるぞしてそ。とびあるそと。われむとも。海をくむとそ。しても
べきをこゝなる。むかしいうるハとこしなる辞の格りたがへりすべて此法まで
よれゝのよくて。今の世の人乃かてなそぶ書ある有ふおどろ
かしおくし。すまとしすべてハ。てふをも此格ハゆしききぞ。

伊勢物語

第二段 西の京に女ありけり［けり］その女世人にはまされりけり［けり］その人かたちよりは心なん［なん］まさりたりける［ける］

此段の文を見て。けりとけるといふ辞をはかりあつかひつるに。その心とことの格一つもたがふことなし。心をつけて考ふべし

第十段 むかし男むさしの国までまどひありきけり［けり］さてその国にある女をよばひけり［けり］ちちはこと人にあはせんといひけるを。母なん［なん］あてなる人に心つけたりける［ける］父はなほ人にて。母なん藤原なりける［ける］さてなん［なん］あてなる人にと思ひける［ける］此むこがねによみておこせたりける［ける］すむところ［なん］入間の郡みよしのの里なりける［ける］みよしのゝ云々

此段のけりとけるとのつかひやう。皆格のまゝなる中に。よみておこせたりけるといへるは上にぞなんなどもなくてけると結べきをけるといへるは上にぞといふべきをはぶきたるなり。また入間の郡の次の詞をへだてゝ結べるなり。さてよみておこせたりけるは

いふより前へかゝる格也。此例つねにおほかり。伊勢集にある大和物語の東下りの条にかくいへり。

第八十二段 みこのたまひ［けり］詞 かくる雪をかたりて云々

第九十六段 女いひおこせ［ける］詞 今は何の心もなし云々

此けるも。前へかゝる格と同じ格にて。次の詞へつゞけていへるなり。次の詞をあはせて見るべし。

第百一段 いやしき男もたり［けり］志を次のつごもりにと云々

此けりもかゝる女といふことにて。女といふことをふくみたる格也。此格もつねにおほかり。

第百一段 かうじおちたりかり［なん］あるじしたまふときゝてきたりければこ

らくよませけるもとよりなきはらく

此ちらかゝなるもとのかくると同じ格にて。ちらかゝなる男といふことし。さてまた よませけるは。ならるとしけるかといふ。下へ辞を添て心得る格にし。けるがと。けかと を添て 見れば。俗言にはん心得やすし。此格もつねにあることにて。紫式部集にも やうやうなりは 友ちおほりし人の年ごろへて ゆきあひたる。ほのかにて十月十日のほど月にきほひ むてかへりにければといへる。此 ゆきあひたるも同じ格にて。けるをとらへるにといふこと なり。けるかとかを添て見れば いとやすし。かくのぬきことを。今の人をかしといふこと。然き ことばをいひてはつゞなし。かたをさにたいそして。とくに次の流へいひつゞる格 なりかなれば此格りいふべき流のいきかひ常にあることなしよくくれわかくべし

第六十三段 三条 なりける子 なん よきれ男 ぞ いでこ ん と いそ ぐる に らく。

これハ二首のてふをその格りて。上のなんハ。まく下までかゝりて いそぐるのなるふ て結べる。ぞを中間にぞいでらんといふ短き流のそさまりたる流。ぞと見ていひらぶせ ぶし此格なりと心得て。二の歌に出たり。文みハ結りたるし。さて 又こてハいそハなる まで上のなんを結びけるを。ぶと見て。又下へつゞきけるし。かくのおもく。切るるところ をやめて又下へ流ぐるすも。 文りハおろしいう格なり

第百廿四段 いう あり まるる事 思ひけるきりに か よまる

此かを今の人をおもくやといふし。きべて何 などの下ハ。皆かといふすまそ。やといふハ むぐすなることの歌 何の流りあくいてがおし。今の人。文みハ結ぶよく 誤るす なるがゆゑに今文 など ろりしおくなり

第六十三段 ふくろ結子 を なさきなくいふへてやと ぬ 上はそといへる流ぬと結ぞ。 ぬるとハ結ぞに

同段 ある人 を いと形さけな し 上みそといへるなにあしと 結べり。なきとハむすびぞ

第八十七段 ちりのかゝ流る を せうかうじくるを結たきさ出てちかきお つ おつるとハ 結ばず

第六十三段 まことおもらぬ事がくりを き 上みぞのや何の辞なきなに まるとハ結ぞに

同段 女なりぎきて ぬ とて。 上みぞのや何の辞なきなにぬるとそとハいふぞ。今の人ハくに ならるるよかなりぬる。そてといふ。そハむがこそなり

第九十六段 こゝ代やきうてい ぬ いぬるといへるんハ むがちくし

第六十九段 そこに ぞ あ なる とハきけど ぞの上ハあり といふ格なれど。こゝハ上みぞといへ ぶなぶなるといへる。此すゑの巻との歌み来し

第四十段 なかに思ひて こそ いひ しら

第四十九段 かく こそ 思ひ しら とひぬるを

件の格どもハ。人のつねに語ることもあるなれバ。いくらも出せり。すべて文のてふをそへ。
今の格とかはりて同じたぐひの格どもゝおほかるべし。

源氏物語

桐壺 「いづれ」の御時に「か」女御更衣あまたさぶらひ云々

同巻 「いか」さまに「か」とおぼしまどはる

同巻 「いかに」きこゆべきかたなきに「か」ぞともうく

此あたりひきて。何事の下にかをやといふハ。むかしある事也。上にも所々にいへるごとく
を對に今の人乃ことに誤りて。やとのみいひて。かといふべき格なるを知らざるハ
ひ。又もしくハさに
まじひなきに

同巻 父の大納言ハなくなりて母北の方「なん」古への人のよしあるにて
おやうちぐしさしあたりて世のおぼえ花やかなる御かたぐにもおと
らず何事の儀式をもてなし給ひ「けれど」云々

此なんハ。結ひ「けれ」どゝいふまでへかゝれり。なんの結びなれバ。けるといふべきを。轉じ
て「けれ」どゝいひて。やがて下へ續きたる也。さて又かゝる文のごとく。語の長く續
くところハ。後世人の文などハ。やゝもすれバ上のかゝりをわすれて。てにをはのとゝのへをたがふる
て。結びをいづれの所ともさだかならず。まぎれ「ける」ゆくこともおほきハ。文かゝる
ぞてにをはのへのかゝりをよくも心得ざる
ゆゑの誤りなり。「なれ」又よく心得おくべきなり

同巻 参り給ひなんと彼のこ「なん」たゞしいそぐ「なれ」ど云々

「なれ」もなんの結びハなれるあるを。轉じてなれどゝしやがて下へつゞきたる也。
なんと同じ。此格今ハいともかしこく。文にはつねにおほきことなり

○此源氏に於物語などハ。すべて人のいへる詞乃いとおほやけなるところ。文なへ
んのう、此なぐなどまでいとくわしくかきたるゆゑある物なれバかゝる
まじらひたるてにをはを。又ぞなんてふなどもかゝりて。ほきくの文をへだ
て。下におきても結べるなど。或ハその中間に二重にも三重にも
かさなりてにをはなど昔あれバ。そのところく結ぶべきの語のをさをさよ

くだされまへだして。あやげなふみまで。まぎらはしきまでおほし。さる
ながひも。みなこなかなかをつきて。よくわきまへざるときハ。そのへのまぎらはしく
いとよくこゝろえてしらべてふみをはのみでよむるにハ。あさましくわきまへし。
○いづれも此書にも。りとゞるとハ。上よりつゞけてあるなど。字の形のよく似さ
ふたつをしるまがへるくたぐひに写し。いやまぎるゝがおほき故。そのむねしるして見
せば。さるがひらなきものぞ。

上件ハ古今集土左日記いせ物語源氏物語なとにいへるが中に。この日
ごろの物語書どもを引出るにハ。なべて此例も見えてよく。又註り
人のめぢかくよみなれつる物語なれバなり。さて又此書注ハ。
ふみにて八峯つまどもそのふるく此てふみをそとておのおのちとある物

そはあらばいづれの物語ある事のへをもむすびしくてかならずあら
なきまでことかきてよりしてよみむかへふまるべし。殊に文章の
つたなきを此るする。今さらしおまるふいと多ほしきふしハあまた
どもひとりてゆるバ。みながら此のへとりなし同しくよまバ。なほさ
くておほくはめかしつるを物の法などもいふバ。まろくと
いふなんうし。

阿羅和加毛。久々思那阿詞安之と
少那毘古那傳ちはまる。畏（カシコ）伎也て（アヤ）
照（テラス）大御神乃。岩戸ニ隠坐時
天乃。安河乃ニ天（アメ）乃石屋戸（イハヤド）
出（イデ）坐路流て。常（トコ）夜（ヨ）由波年毛母
安羅来ニ波ニ佐尓照（テリ）明（アカ）
手計留毛。由加志穿（ボコ）中ニ天毛

多天乃中臣(ナカトミ)乃。天津告刀(ノリト)乃婦刀ゝ
乃理詞(コト)乎。麗(ウルハ)之久可久爾ゝ宇乃利
志多比三里乃。於能毛里登曽乃
多加乃止乃利氐以久加奴布奴
爾久毛乃波乃能氐能古能奈宇之吉
毛多布知伊豆(イヅ)久能神乃御心(ミコヽロ)乃
加理多曽。中津代乃末(スヱ)都方天(アメ)乃

不多多能爾布禮地止比多加乃
奈可米。秋草(アキクサ)乃加多牟由宇留
爾布牟。此加之乃布多之乃伊
加乃佐保礼利草曽比女。其乃宇乃
能。貫(ヌキ)安可乃多牟流人奈天乃
比宇布乃加多須倍(ヘ)爾乃神爾。
於乃由氣。宇布母止波流文。天乃

不尓鞆於吉毛聞之夏。乎は夏
於佐米万毛於久能乎は夏之。
米乃代未伝尓。勢久佐加羅奴字
良之於頂里尓乃志麻万理之。
咲久於尓原年貫以佐於根之。
由久未於大寿世尓於女。未寿
左加牟乎に多礼須女。寿於為を

毛。又伊尓之常尓左河楽海磯
佐加加多未け奴加加毛。吾鈴於
屋乃尓落大人伊。河之多万於米
満禄久以多斯并未之。比也乎
鹿於和毛於真乃筆を。可夜め乃
多多之理於於多之久虎乃之か多
調多牟三慄於之乃玉於之夏。

久留之久乎与理加之古美於牟
之。廿七来波子那米那之伝
都気年留。加久此度止之弖那之
於幣奈。来無加之乃伝路気都幾
波米。今止与之後波。伊加之於牟之
能靜（シヅ）来利加之米子与。乃人於
志加之波米於玉乃伊深津之那几

毛。由波比於来与以那久。我毛
速於孫礼能那子己知
加之綾（アヤ）尓年詞志波此也那留
子毛。加久云（イフ）度。志乃宇之子美奈
以礼年流。美洪、國人因不足万倍

瓊綸餘縷（タマノヲノコリイト）

鈴屋文集

同歌集

嗣出

文政十二己丑年再刻

書肆

江戸日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛

京寺町通松原下ル町　銭屋利兵衛

同寺町通蛸薬師下ル町　勝村治右衛門

同御幸町御池下ル町　伏見屋半三郎

大坂北久太郎町四丁目　菱屋孫兵衛

河内屋新次郎

勢州松坂　柏屋兵助